

心全体の価値（前半の部分）とその適用範囲（後半の部分）を示すものである。

まず三心の価値については、三心具足すれば必ず往生できることをこの文は示している。

次に三心の適用範囲については、三心は元来、『観経』の上品上生のところに説かれていたものである。従ってそれは散善行の一つということになる。しかしここでは定善にも通ずるものと、その範囲を拡大しているのである。

三心は直前に述べた如く『観経』では上品に属する行、即ち散善行の一つであるが、善導はこれをまず散善行全体、即ち上品から下下品に至る行者のすべてに通ずるものとする。（これは『観経疏』散善義、十一門料簡、第四弁定三心に一科を設けて示されている。浄全二ノ五五頁。）しかし定善と三心との関係は何も述べていない。それ故ここでは三心が定善にも関わるものであることを示しているのである。

この三心の適用範囲についての法然の法語を見てみよう。古本「逆修説法」には

文雖^レ在^ニ上^々、義可^レ通^ニ下^々。但随^ニ三心^ノ浅深[、]可^レ有^ニ九品^ノ階位^一也。然者、始^{メテ}自^リ上^々品、終^リ至^ニ下^々品、具^メ足^ニ三心^一、必得^ニ往生^一。故云^ニ若少^一一心即不得生^ト。（註、『礼讚』の文）但天台等諸師意不^レ尔矣。（昭法全、二四一頁。）

とあり、正徳版「逆修説法」には

……故云^ニ若少^一一心即不得生^ト也。又非^ニ但通^ニ九品^ノ、亦通^ニ撰^ニ定善^一

也。但天台等諸師意不^レ尔。（昭法全、二八四頁。）

とある。まず古本「逆修説法」に「法然聖人御法事」も同じ。同、一八〇頁）によれば、三心の文は上品上生に見えるが、これは上は上品から下は下下品まで、即ち九品全体（散善全体）に通ずるものであるとするのである。しかしここには、「定善」にも通ずるとは記されていない。しかし正徳版には「ただ九品のみに通ずるに非ず、また通じて定善を撰する也。」とある。これは先の善導の文「この三心はまた通じて定善を撰すの義、まさに知るべし」に殆んど同じく、三心の中に「定善」を含める点で同趣のものである。古本ではなぜ「定善を含む」部分が欠落しているのだろうか。これは、三心と定善との関係に意を配らなかつたためだろうか、或は善導のこれに関する言葉を見落したためだろうか、或は古本が三心と下下品又は散善九品全体との関係のみを念頭において、定善との関係を見または軽視していたためであろうか。

むすび

一、法然は善導の思想を継承しているが、廻向発願心についていえば、善導のいわゆる廻向発願心の本質（A）に関連する発言が最も多い。これは文字通り本質を表わす部分であるからだろう。『礼讃』ではこのAに関連する部分がより簡潔に示されているのみである。

二、三心不離（B）に関連しては、法然の本質に触れる発言の中でも、廻向発願心と真実心が合せて説かれている場合はあっても（①②）、深信が明白に示されていなかったり、また金剛不壞の深信が説かれても（『浄土宗略抄』『御消息』『十二箇条の問答』）、真実心が明示されなかったりしている。この意味では、廻向発願心を積するに当って、法然は善導をそのまま援用したとは思えない。（⑩）には三心不離が見えるが、恵心の義とある。しかし法然に三心不離の思想がないわけではない。これは三心具足についての法然の考へに明白に表われている。一例をあげると「御消息」に三心各様を説いた後「詮しては、たゞま事の心ありて、ふかく仏のちかひをたのみて、往生をねかはんするにて候そかし。」（昭法全、五八五頁）と示している。ここにおける「ま事の心」は真実至誠心、「ふかく仏のちかひをたのみて」は深信、「往生をねかはんする」は廻向発願心ということになる。（引文⑥参照。その他、拙稿「法然上人の三心具足に関して」『仏教論叢』第二六号参照）

三、有縁の經について、善導はここにあげているが、この考えは法然では「深心積」において援用されている（拙稿、「法然上人の深心積『東海学園女子短大紀要』第十六号参照）が、廻向発願心の積ではとくに見られない。

四、廻向発願心とは、一切の善根功德を廻向して浄土往生を願う心である。その最も簡略された形は「往生を願う心」と示される。（⑧⑨他）

五、この場合念仏と諸行の問題があるが、究極的には念仏の一行につきるのである。（『浄土宗略抄』『御消息』f）

六、一切の善根功德を廻向するといっても、それは凡夫の業そのものが勝れているからではなく、阿弥陀仏の本願によるからである。（⑧）

七、二河白道については（F・G）、法然の廻向発願心に関連する法語には見えないが、「三部経大意」（昭法全、三六頁）に見える。

八、還相廻向については、廻向発願心を積する中だけでなく、その他のところにおいても見られる。その説き方は様々であるが、善導の原意がよく示されている。

『観経疏』には廻向発願心について語った後、三心について次の如く示している。「三心すでに具すれば、行として成ぜずということなし。願行すでに成じて、もし生ぜざるといわば、このことわりあることなきなり。またこの三心は亦定善の義を撰す。まさに知るべし。」（浄全、二ノ六一頁。）これは廻向発願心そのものでなく三

違いなしとの金剛心をもつことである。そしてこの廻向発願する心を深く信じて念仏相續すれば十即生百即百生が可能となるのである。

⑨「十二問答」には三心について種々なる方法で説かれている。

(同、六四一—四三頁) 廻向発願心についてのものをあげると次の如くなる。

廻向発願心と云は、往生して衆生を利益せんと思ふ心也。

往生せんと思ふは廻向心也。

往生をねかふは廻向発願心也。

(引文⑥参照)

⑩「七箇条の起請文」には前に掲げた廻向発願心の本質を示す言

葉をあげた後、続いて、恵心僧都の御義をあげている。

又つねに退する事なく念仏するを廻向発心といふなり。これは恵心の御義也。この心ならば至誠心深心具足してのうゑに、つねに念仏の数遍をすへし。もし念仏退転せば、廻向発願心かけたるもの也。(同、八〇九頁)

ここには三心不離説が示され、念仏を数多く申すことが強調されている。ここでは自他の行をあれこれ述べてはいない。唯念仏の一行を勧めている。念仏と廻向発願心が明白に結びついて示されているものに次のものがある。

⑪「聖光房に示されける御詞」

三廻向発願心と云は、たゞひとすぢに、極楽にまいらむずるため念仏なりとの思いをいふ也。(同、七四四頁)

⑫「三部経大意」にも廻向発願心に関する言説が見えるが、これを要訳すると次の如くである。かの国には九品の差別があるが、究極的にはわれわれは上品往生を願うのである。罪悪生死の凡夫は古來下品生であるとされるが、仏の願力によって上品往生が可能である。「本願意趣、上品ノ来迎ヲマウケ給ヘル物也」(同、四五頁)である。かくの如く廻向発願心は上品往生を願うことのようにであるが、これはまた、上品往生は自分のためではなく、「カヘリテ疾ク衆生ヲ化セムカ為」(同)でもある。ここには還相廻向の考えが見える。

⑬「観経釈」「選択集」(第八章)には「廻向発願心の義、別釈をまつべからず、行者まさにこれを知るべし」(同、一二七、三三四頁)とあるだけで、詳しい説明はない。

4、還相廻向に関して

還相廻向の思想は直前にあげた、「十二問答」(⑨)「三部経大意」(⑫)などに見える。また、この思想は廻向発願心を明かすところ以外でもしばしば示されている。(拙著『法然浄土教思想』百華苑、一二三頁参照)

とについても、極樂以外の、例えば都率の浄土（「御消息」のみ）、人中天上に生まれることを願って、あれこれ廻向すべきではない。

e、このことを知らなかった過去において、現世のことを祈り、望ましくない方向に廻向した功德をも、今はみな取り返して、専ら極樂に廻向して往生することを願うべきである。

f、一切の功德をみな極樂に廻向せよといったからといって、念仏以外にわざ／＼功德を作り集めて廻向せよというのではない。

g、過去の功德、またこれから便宜に従って行う念仏以外の功德、例えば僧に供養すること、人に物を施し与えること（この二例は「略抄」にのみある）なども、みな往生のために廻向すべきである。（「すべしという心」元亨版「略抄」）

h、この心は、異解（別行）の人に惑わされない、例えば金剛石の如き何物にも破壊されない確固たるものであるべきである。

ここにおける廻向発願心の釈は、善導の原文ではAとBの個所に關わるものであるが、しかし三心不離については「往生のために廻向する」のを廻向発願心とし、「この心金剛のごとく」を深信と見ても、「真実心」は明白ではない。

結局ここでの廻向発願心とは「過去及び現在の自他凡聖のなしたる一切の善根功德を、別解別行の人に惑わされることなく、専ら極樂往生のために廻向する心」というものであろう。

3、その他の法語

⑦「要義問答」は善導の文に類似したものをあげ、最後に「已上善導ノ釈ノ文ナリ」と記している。これによれば、ここでの文は必ずしも善導の文そのものではないが、善導の文として長々と引用したものである。さて引用されているのは、次の六箇所である。

即ち、A廻向発願心の本質、B三心不離説、F二河白道、Gその意味、H白道信行、I還相廻向に關するものである。（昭法全、六二一頁）

⑧「十二箇条の問答」

次に廻向発願心といふは、わか修するところの行を廻向して、極樂に生まれんとねかふ心也。わか行のちから、わか心のいみしくて往生すへしとはおもはず、ほとけの願力のいみしくおはしますによりて、むまるへくもなき物もむまるへしと信して、いのちおはらば仏かならすきたりてむかへ給へと思ふ心を、金剛の一切の物にやふられざるかごとく、この心をふかく信して、臨終までも、とおりぬれば、十人は十人ながらむまれ、百人は百人ながらむまるゝ也。（同、六七七頁）

これを要訳すれば、廻向発願心とは、まず自分の行を廻向して極樂に生れんと願う心である。（これは一部原文のAに關連する）しかし「自分の行の力」「自分の心のいみじき」によって往生できるのではない。それは「願力」即ち阿弥陀仏の本願力の「いみじき」によって、本来往生できないものが往生できると信じ、臨終來迎問

<p>g</p> <p>たゞすぎぬるかたの功德をも、今は一向に極楽に廻向し、このちなりとも、おのつからたよりにしたかひて僧をも供養し、人に物をもほとしあたへたらんをも、つくらんにしたかひて、みな往生のために廻向すへしという心也。</p>	<p>h</p> <p>この心金剛のことくして、あらぬさとりの人におしへられて、かれこれに廻向する事なかれといふ也。</p> <p>金剛はいかにもやふれぬものなれば、たとへにとりて、この心をもて廻向発願してむまると申也。</p>
<p>たゞすぎぬるかたにつくりをきたらん功德をも、もし又このちなりとも、おのつから便宜にしたかひて、念仏のほかの善を修する事のあらんをも、しかしなから往生の業に廻向すへしと申す事にて候也。</p>	<p>この心金剛のことくにして、別解別行の人にやふられされと申候は、さきにも申候つる様に、ことさとりの人に、おしへられて、かれこれに廻向する事なかれと申候心也。</p> <p>金剛はやふれぬものにて候なれば、たとへにとりて、この心のやふられぬ事も、金剛のことくなれと申候にやとおほへ候。これを廻向発願心とは申候也。</p>

a、自分が前(先)世及びこの世で作った善根功德を、みな悉く極楽に廻向して往生を願うこと。「御消息」では「先世と今世」、「身口意三業による功德」がはっきりと示されているが、「略抄」ではこの点が不明である。善導でも『礼讃』ではこの点がはっきりとは示されていない。

b、自分の作った功德だけでなく、一切の凡夫、聖者の作った功德をも随喜すれば、みな自分の功德となるので、悉く極楽に廻向して往生を願うこと。「略抄」では凡・聖を具体的に示して、凡は凡夫、聖は仏菩薩としている。「御消息」では聖については「略抄」と同じく具体的に示しているが、凡については「こと人」としている。ここにおける「こと」が「異」である(正徳版)ならば、この意味は何か。自分以外の他人という意味か、異解異見の人という意味か。この点について、文脈上から見ると、まず「わが身の功德の

みならず」とあるから、続く「こと人」とは「自分以外の人」(それが凡夫か否かは不明)と解するのが妥当であろう。では「異解異見の人」を指すという考えはどうであろうか。一応はこのように人も含めた自分以外の人ということもいえるであろう。しかし「異解異見の人」は善導の原文では「惑わされてはならない人」を指しており、またこの法語の後の方で、「別解別行の人」「ことさとりの人」(異解人——正徳版)に教えられてかれこれ廻向する必要はないと示されていることからすれば、「異解異見の人」はここにおける「こと人」からはずされるべきであろう。

c、廻向発願心とは要するに往生を願うことであって、それ以外のことではない。これは「略抄」にあって「御消息」ではない。これはまた先の引文⑥と同趣である。

d、自分のこと、他人のために現世の果報を祈り、また来世のこ

<p>「浄土宗略抄」(昭法全、五九九頁)</p>	<p>「御消息」(昭法全、五八三頁)</p>
<p>a この積の心は、まつわか身につきて前世にもつくりとつくりたらん功德を、みなこと／＼く極楽に廻向して往生をねかふ也。</p>	<p>この積の心は、まつわか身につきて、さきの世およびこの世に、身にも口にも心にもつくりたらん功德、みなこと／＼く極楽に廻向して往生をねかふ也。</p>
<p>b わか身の功德のみならず、一切凡聖の功德なり。凡といは、凡夫のつくりたらん功德をも、聖といは、仏菩薩のつくり給はん功德をも、随喜すればわか功德となるをも、みな極楽に廻向して往生をねかふ也。</p>	<p>つきにはわか身の功德のみならず、こと人のなしたらん功德をも、仏菩薩のつくり給ひたらん功德をも随喜すれば、みなわか功德となるをも、こと／＼く極楽に廻向して往生をねかふ也。</p>
<p>c 詮するところ、往生をねかふよりほかに、異事をはねかふまじき也。</p>	<p>すへてわか身の事にも、人の事にも、この世の果報をいのりおなじくのちの世の事なれとも、極楽ならぬ余の浄土に生まれんとも、もしは都率に生まれんとも、もしは人中天上に生まれんとも、たとひかくのことく、かれにても、これにても、こと事に廻向する事なくして、一向に極楽に往生せんと廻向すへき也。</p>
<p>d わか身にも人の身にも、この界の果報をいのり、又おなじく後世の事なれとも、極楽ならぬ浄土に生まれんともねかひ、もしは人中天上に生まれんともねかひ、かくのことくかれこれに廻向する事なかれと也。</p>	<p>もしこのことほりを、おもひさためさらんさきに、この世の事をいのり、あらぬかたへも廻向したらん功德をも、みなとり返して、往生の業になさんと廻向すへき也。</p>
<p>e もしこのことほりを思ひさためさらんさきに、この上の事をいのり、あらぬかたへ廻向したらん功德をもみなとり返して、いまは一すちに極楽に廻向して往生せんとねかふへき也。</p>	<p>一切の善根をみな極楽に廻向すへしと申せはとて、念仏に帰して一向に念仏申さん人の、ことさらに余の功德をつくりあつめて廻向せよとは候はず</p>
<p>f 一切の功德をみな極楽に廻向せよといへはとて、又念仏のほかにわざと功德をつくりあつめて廻向せよといふにはあらず。</p>	

のである。ここには三心具足の念仏が集約的に表現されている。その意味でも、ここでの廻向発願心義はその心体を表現しているものといえよう。

2、A Bに関連する言葉。
これは「浄土宗略抄」と「御消息」に見える。私積があるので、両法語の対照表をあげ、内容を吟味する。

三、法然の廻向発願心釈

1、Aに関連する言葉

Aは廻向発願心の本質にかかわるものであるが、これは『礼讃』にも簡潔に示されている。即ち『礼讃』には「作す所の一切の善根悉くみな廻して往生を願ず」とある。(浄全四ノ三五四頁)これを『観経疏』の文と比較すると、二ヶ所、重要な点が欠落している。一つは「自他所修の世・出世の善根」ということ、他は「真実深信の心中」という点である。即ち『礼讃』では「だれの善根功德か」また「どのように廻向するか」という点が明白に示されていない。このことはまた法然の法語の中にも微妙な相違をもって表われている。以下法然の法語を考察してみよう。

①廻向発願心といふは、過去および今生の身口意業に、修するところの一切の善根を、真実の心をもて極楽に廻向して往生を欣求する也。これを廻向発願心となづく。(「三心義」昭法全、四五七頁。「十七条御法語」、同、四七二頁)

②廻向発願心トイフハ、自他ノ行ヲ真実心ノ中ニ廻向発願スル也。(「念仏大意」同、四〇九頁)

③廻向発願心ト申ハ、ユレ別ノユコロニテハ候ハス、ワカ所修ノ

行ヲ一向ニ廻向シテ往生ヲネカフユコロナリ。

(「大胡の太郎実秀へつかはす御返事」同、五一九頁)

④廻向発願心といふは、無始よりこのかたの所作のもろくの善根を、ひとへに往生極楽といひのる也。

(「七箇条の起請文」同、八〇九頁)

⑤廻向発願心といふは、修するところの善根を極楽に廻向して、かしこに生せんとねかふ心也。

(「念仏往生義」、同、六九二頁)

⑥往生シテムト 思心ツハ廻向発願心也。

(「三心料簡および御法語」、同、四五〇頁)

これらの法語を見ると、まず『観経疏』所説の廻向発願心の本質を表わす思想に準じて説かれているものがある。(①、②)そしてそれが簡略化された形で説かれる場合には『礼讃』に説かれるような表現が見られる。(③④⑤)そしてさらにこれが集約された形になると、「往生しようと思う心」という表現にもなる。(⑥)

この引文⑥は、実は三心具足の念仏について語る中に見えるものである。ここでは「一向の心にて念仏して、疑いなく往生せんと思へば、即ち三心具足なり」として「一向の心とは至誠心なり。疑いなしは深信なり。往生してむと思ふ心は廻向発願心なり。」というも

『選択集』（第八章）のみ善導の文を全文引用している。「要義問答」にはA B F G H Iの箇所が（多少表現の違いはあるが）善導の釈文として引用されている。（昭法全、六二二頁）「御消息」「浄土宗略抄」にはA B二ヶ所、その他多くの法語にはAとほぼ同じ

二、法然の引用

か、それに関連した言葉が見える。これらによれば法然の関心はAに最も多くあったようであり、これが廻向発願心の中心なる言葉と考えておられたようである。また先に示した如く、法然の深心釈に見える、「有縁の法」に関する考え方はこの廻向発願心のEの思想に付合することは注意しておかねばならない。

I	H	G
又言 ^ハ 三回 ^ト 向 ^ト 者 ^シ 生 ^シ 彼 ^ノ 国 ^ニ 已 ^テ 還 ^リ 起 ^リ 三 ^ニ 大 ^ニ 悲 ^ヲ 回 ^リ 入 ^リ 生 ^シ 死 ^ニ 教 ^ス 化 ^ス 衆 ^ヲ 生 ^ヲ 亦 ^ク 名 ^ク 回 ^リ 向 ^ト 也 [。]	又一切 ^ノ 行 ^ヲ 者 ^ノ 行 ^キ 任 ^シ 坐 ^シ 臥 ^シ 三 ^ニ 業 ^ヲ 所 ^レ 修 ^ム 無 ^ク 間 ^断 晝 ^ノ 夜 ^ノ 時 ^節 常 ^ニ 作 ^ル 此 ^ノ 解 ^ヲ 常 ^ニ 作 ^ル 此 ^ノ 想 ^ヲ 故 ^ニ 名 ^ク 回 ^リ 向 ^リ 發 ^ス 願 ^心 也 [。]	次 ^ニ 合 ^シ レ ^テ 喻 ^フ 者 ^ノ 言 ^ハ 東 ^ノ 岸 ^ト 者 ^ノ 即 ^チ 喻 ^フ 此 ^ノ 娑 ^婆 之 ^ノ 火 ^宅 也 [。] 言 ^ハ 西 ^ノ 岸 ^ト 者 ^ノ 即 ^チ 喻 ^フ 極 ^樂 宝 ^國 也 [。] 言 ^ハ 羣 ^賊 惡 ^獸 詐 ^親 者 ^ノ 即 ^チ 喻 ^フ 衆 ^生 六 ^根 六 ^識 六 ^塵 五 ^陰 四 ^大 也 [。] 言 ^ハ 無 ^レ 人 ^空 過 ^河 者 ^ノ 即 ^チ 喻 ^フ 常 ^隨 惡 ^友 不 ^レ 值 ^中 真 ^善 知 ^識 也 [。] 言 ^ハ 水 ^火 二 ^河 者 ^ノ 即 ^チ 喻 ^フ 衆 ^生 貪 ^愛 如 ^レ 水 ^瞋 憎 ^如 レ ^火 也 [。] 言 ^ハ 中 ^間 白 ^道 四 ^五 寸 ^者 即 ^チ 喻 ^フ 衆 ^生 貪 ^瞋 煩 ^惱 中 ^能 生 ^ス 清 ^淨 願 ^往 生 ^心 也 [。] 乃 ^由 貪 ^瞋 強 ^ニ 故 ^ニ 即 ^チ 喻 ^フ 如 ^レ 水 ^火 二 ^善 心 ^微 故 ^ニ 喻 ^フ 如 ^レ 白 ^道 又 ^レ 水 ^波 常 ^濕 道 ^者 即 ^チ 喻 ^フ 愛 ^心 常 ^起 能 ^染 汚 ^善 心 ^也 又 ^レ 火 ^燄 常 ^燒 道 ^者 即 ^チ 喻 ^フ 瞋 ^嫌 之 ^心 能 ^燒 功 ^德 之 ^法 財 ^也 言 ^ハ 下 ^入 行 ^道 上 ^直 向 ^西 者 ^ノ 即 ^チ 喻 ^フ 下 ^迴 諸 ^行 業 ^直 向 ^中 西 ^方 也 [。] 言 ^ハ 下 ^東 岸 ^聞 入 ^声 勸 ^遣 尋 ^道 直 ^西 進 ^上 者 ^ノ 即 ^チ 喻 ^フ 積 ^迦 已 ^滅 後 ^人 不 ^レ 見 ^由 有 ^レ 教 ^法 可 ^レ 尋 ^即 喻 ^レ 之 ^如 レ ^声 也 [。] 言 ^ハ 或 ^行 一 ^分 二 ^分 羣 ^賊 等 ^喚 迴 ^者 即 ^チ 喻 ^フ 別 ^解 別 ^行 惡 ^見 人 ^等 妄 ^說 見 ^解 一 ^迭 相 ^惑 乱 ^及 自 ^造 罪 ^退 失 ^上 也 [。] 言 ^ハ 西 ^岸 上 ^有 レ ^人 喚 ^者 即 ^チ 喻 ^フ 彌 ^陀 願 ^意 也 [。] 言 ^ハ 須 ^臾 到 ^西 岸 ^善 友 ^相 見 ^喜 上 ^者 即 ^チ 喻 ^フ 衆 ^生 久 ^沈 生 ^死 曠 ^劫 淪 ^迴 迷 ^倒 自 ^纏 無 ^レ 由 ^解 脫 ^仰 蒙 ^積 迦 ^發 遣 ^指 向 ^{西方} 又 ^藉 彌 ^陀 悲 ^心 招 ^喚 今 ^信 順 ^二 尊 ^之 意 ^不 レ ^顧 水 ^火 二 ^河 念 ^念 無 ^レ 遺 ^乘 彼 ^願 力 ^之 道 ^捨 命 ^已 後 ^得 生 ^彼 國 ^与 レ ^仏 相 ^見 慶 ^喜 何 ^極 也 [。]
○	○	○
△		
	△	△
△		

D	E	F
<p>答曰諸仏教行數越塵沙、稟識機緣隨情非一、譬如世間人眼可見、信者如明能破闇、空能含、有地能載、養水能生、潤火能成、壞一如此等事、悉名待對之法、即目可見、千差万別。</p>	<p>何況佛法不思議之力、豈無種種益也、隨出二門、一者即出煩惱門、也隨入二門、一者即入一解脱智慧門、也為此隨緣起行、各求解脱、汝何以乃將下非有緣之要行、上障三惑、於我然我之所愛、即是我有緣之行、即非汝所求、汝之所愛、即是我有緣之行、亦非我所求、是故各隨所樂而修、其行者必疾得解脱、也行者當知、若欲學解、從凡至聖、乃至仏果、一切無礙、皆得學也、若欲學行者必藉有緣之法、少用功勞、多得利益也。</p>	<p>又白一切往生人等、今更為行者說、一譬喻、守護信心、以防外邪、異見之難、何者是也、譬如有人欲向西行、行二百千里、忽然中路見有二河、一火河、一水河、在東北、二河各闊百步、各深無底、南北無邊、正水火中間、有一白道、可闊四五寸許、此道從東岸至西岸、亦長百步、其水波浪交、過濕道、其火燄亦來燒、道水火相交、常無休息、此人既至空曠、迺更無人、物多有羣賊、惡獸、見此人、單獨競來欲殺、此人怖死、直走向西、忽然見此大河、即自念言、此河南北不見、邊畔中間、見一白道、極是狹小、二岸相去、雖近、何由可行、今日定死、不疑、正欲到迴、羣賊惡獸、漸漸來逼、正欲南北避走、惡獸毒蟲、競來向我、正欲向西、尋道而去、復恐墮此水火、二河、當時惶怖、不復可言、即自思念、我今迴亦死、住亦死、去亦死、一種不勉、死者我寧尋此道、向前而去、既有此道、必可度、作此念、時東岸忽聞人勸聲、仁者但決定尋此道、行必無死、難若住、即死、又西岸上、有人喚言、汝一心正念、直來我、能護汝、衆不畏、墮於水火之難、此人既聞此遣彼喚、即自正當、身心決定、尋道直進、不疑、怯退心、或行一分二分、東岸羣賊等、喚言、仁者迴來、此道險惡、不得過、必死、不疑、我等衆無惡心、相向、此人雖聞喚聲、亦不迴顧、一心直進、念道而行、須臾即到西岸、永離諸難、善友相見、慶樂無已、此是喻也。</p>
○	○	○
△	△	△

C	B	A	
<p>問曰若有^二解行不同^一邪雜人等^二來相惑亂^一或說^二種種疑難^一道^レ不^レ得^二往生^一或云汝等衆生曠劫已來及以今生身口意業於^二一切凡聖身上^一具造^二十惡五逆四重謗法闡提破戒破見等罪^一未^レ能^二除^一然此等之罪繫^二屬^一三界惡道云何一生修福念^二仏^一即入^二彼無漏無生之國^一永得^レ証^二悟^一不退位^二也^一</p>	<p>又廻向發願願^レ生^一者^二必須^一決定^二真實心中廻向願作^一得^レ生^二想^一此心深信^一由若^二金剛^一不^レ為^二一切異見異學別解別行人等之所^一動亂破壞^二唯是決定一心投正直進不^レ得^一聞^二彼人語^一即有^二進退心生^一怯弱^二廻願落^一道即失^二往生之大益^一也</p>	<p>三者廻向發願心言^二廻向發願心^一者過去及以今生身口意業所^レ修^二世出世善根及隨^一喜^二他一切凡聖身口意業所^レ修^二世出世善根^一以此^二自他所修善根^一悉皆^二真實深信心中廻向願^一生^二彼國^一故名^二廻向發願心^一</p>	<p>「觀經疏」散善義</p>
○	○	○	選択集(第八章)
	○	○	御消息
	△	○	浄土宗略抄
	△	△	要義問答(第八)
		△	念仏往生義
		△	七箇条の起請文
		△	三心義
		△	大胡太郎実秀につかわす御返事
		△	三心料簡および御法語
		△	念仏大意
		△	十七条御法語
		△	十二箇条の問答
			十二問答

「火焰常に道を焼く」とは瞋嫌の心よく功德の宝財を焼くこと、「人道の上を行き直に西に向う」とは諸々の行業を廻向して西方に向うことを示す。東岸の人の声は釈迦の教法、西岸の喚声は弥陀の願意を表わす。「群賊等の喚廻す」とは別解別行悪見人等の説く見解に惑わされて自から造罪退失すること、「すべからく西岸に到れば善友あい見て喜ぶ」とは迷倒の衆生、かの国に得生して仏と相見

て慶喜無上なることを表わす。H、白道信行^二廻向發願心^一。一切の行者は行住坐臥、三業に修するところ、夙夜を隔てず、常に白道を進む氣持で行くこと。これが廻向發願心である。I、還相廻向。かの国に往生した後、大悲を起して生死に廻入して、衆生を教化すること。

『御法語』には「廻向発願始、眞実深信心中廻向云事。此三心中、廻向云心也。」(四四九頁)と明白に示されている。

B、三心不離なることをさらに説く。まず眞実心の中に廻向して得生の想いをなすこと(至誠心)。この心の深信の想は金剛石の如くなること。一切の異見異学別解別行の人によって動乱しないこと。かれらの言葉に惑わされて往生の大益を失わぬこと(深心)。

以上のことは三心が不離なることを示し、しかも廻向発願心の中に他の二心が具備されるべきことを示すものである。

C、廻向発願心の無価値なることについての問答が示されている。ここではまず問い。解行不同の雜行人が来て相い惑乱し、種々の疑難を説いて往生できぬことを述べ、「汝等凡夫は曠劫よりこのかた及び今生の身口意の三業において、かの凡夫、聖者に対して十悪五逆四重謗法闡提破戒破見等の罪を犯し、未だそれも除かれておられない。この罪惡の凡夫がどうして無漏無生の国に生ずることができるのか。

D、右の答え①。諸仏の教行はすこぶる多い。これは凡夫の機縁が同じではないからである。もしその教と機がうまく適當するならば、それは明よく闇を破し、空よく有を含み、地よく載養(地面がよく物を支え、草木を長養)し、水よく草木などを生かし潤し、火よく物を成熟し、または焼きつくすようなものである。これを待対の法という。目前の現象は千差万別である。

E、答え②。有縁の教。自然現象においてさえ右の如く適當なる相手をうれば偉大な効果が現われる。仏法不思議な力にどうして種

々の利益がないはずがあるか。各々の教えによってそれぞれ煩惱からの解脱が可能である。故に縁に従って各々が行を起し解脱を求めべきである。自他それぞれ有縁の行によって解脱をうることを肝要である。解脱を求めるときは有縁の行によるべきである。

この有縁の教ということについては、すでに善導の「深心」の中で、とくに撰論家等からの批判に答える文(但し、この文中には「有縁」という文字はない。)についての法然の解釈に見える。「要義問答」には「ナムチカ信スルトコロノ經論ハ、ナムチカ有縁ノ教、ワカ信スルトコロハ、ワカ有縁ノ教、イマヒクトコロノ經論ハ、菩薩人天等ニ通シテトケリ。」(昭法全、六二二頁)とあり、また「三心義」には、「聖道門はこれ汝が有縁の行、淨土門といふはわれらが有縁の行。これをもてかれを難すべからず、かれをもてこれを難すべからず。」(同右、五六頁。傍点筆者)とある。ここにも廻向発願心の中に深心が含まれることが示されている。

F、二河白道。北には水の河、南には火の河、東岸には群賊惡獸と釈迦、西岸には阿弥陀仏、白道は巾四、五寸、東岸から西岸までは百歩。

G、二河白道の意味。東岸は娑婆の火宅、西岸は極樂の宝国、「群賊惡獸いつわり親しむ」とは衆生の六根六識六塵五陰四大を示し、「人なき空廻の沢」とは常に惡友に随って眞の善知識に値はないことを示す。水の河は貪愛、火の河は瞋恚、白道四、五寸は衆生の貪瞋煩惱の中で、よく清淨の願往生の心を生ずることを示す。「水波常に道を湿らす」とは愛心常に起きて善心を汚染すること、

法然上人の廻向発願心釈

服 部 正 穩

序

- 一、善導の廻向発願心義の内容
- 二、法然の引用
- 三、法然の廻向発願心釈
- 1、Aに関連する法語
- 2、A Bに関連する法語
- 3、その他の法語
- 4、還相廻向に関して
むすび

序

廻向発願心は善導大師（以下「善導」という）の『観経疏』散善義（浄全二ノ五八頁）及び『往生礼讚』（以下『礼讚』という）前序（浄全四ノ三五四頁）に説かれているものである。法然上人（以下「法然」という）の語録を見ると「浄土宗略要文」は『礼讚』からの文のみをあげ、『選択集』には『観経疏』及び『礼讚』からの

文があげてある。「浄土宗略抄」「御消息」「要義問答」には『観経疏』の文の一部があげてある。以下善導の『観経疏』に見える廻向発願心の内容、及び法然の解釈を考察することとする。

一、善導の廻向発願心義の内容

善導の廻向発願心の内容について、各部の要旨を明らかにしておく。

A、廻向発願心の心体（本質）を示すもので、それは自他の一切の世・出世の善根功德を随喜し、それを真実深信の心中に廻向して、かの国に生ぜんと願することである。自の善根とは自分自身が過去及び今生の身口意の三業によって行って来た世間的・出世間的な善根であり、他の善根とは自分以外の一切の凡夫・聖者の身口意の三業による世間的・出世間的な善根である。また真実深信の心中に廻向するという発言の中には三心（真実||至誠心、深信、廻向発願心）が不離の関係にあることが示されている。『三心料簡および